童話

我儘大男

——オスカア、ワイルド原作——

津田芳雄

子供達は學校から歸るこ毎日大男の庭に行つて遊びました。

それは柔い草が一面に青々こして居る廣い美しい庭でした。草の上にはあちこちにお星樣を散らしたやうに美しい花が咲いてゐました。そして桃の木が十二本あつて、春になるこそれに一杯ピンクで眞珠のやうな綺麗な花が咲き、秋にはおいしい實がなりました。またその木に小鳥がこまつてこても好い聲で歌ひますので、子供達はお遊戯をやめてはそれに聽き入るのでした。

「なんて好い所でせう」こ子供達は話し合ひました。

所が或日のここ大男が歸つて來ました。大男はコーンウオールの「人食ひ鬼」の所に行つて、七年程遊んで來たのでした。七年過ぎるこ、あまり色々な話の出來る男でありませんでしたので、話の種子が切れて、自分のお城に歸る氣になつたのでした。お城に着いてみるこ子供達が庭に入つて遊んでるのです。

「おい、其處で何をして居る?」。

こ大男はごら聲を張り上げました。するこ子供達は走つて逃げてしまひました。

「俺の庭は俺の庭ぢや。それ位のここは誰にだつて分つこる筈ぢや。俺より外の者がこの庭で遊ぶここは承知しない」。

かう云つて大男は庭を高い塀で圍んでしまひました。そしてこんな立札を立てました。

この庭に立入つた者はお巡りさんに引渡す

大男は大變我儘な男でした。

可哀相に子供達は遊ぶ所が無くなつたのです。路で遊んでみましたが、路では埃がひどくて、堅い石ころは一杯あるし嫌だつたのです。子供達は學校が退けるとその高い塀の周りをぶらついて中の美しい庭の噂をするのでした。

「此處は本當に好い所だつたね」

とお互に申しました。

それから春が來て、そこいら中何處にも花が咲いて小鳥が囀るやうになりました。どうしたものかこの我儘大男の庭の中だけは未だ冬でした。子供達がゐないので小鳥は歌ひたくなかつたのです。また木は花を咲かすことを忘れたのでした。一度だけ、綺麗な花が一つ、草の間から頭をもたけたことがありましたが、例の立札を見て、子供達が本當に氣の毒になり、直ぐ又地の中にもぐり込んで、眠つてしまつたのでした。喜んだのはお雪さんとお霜さんだけでした。

「春さんはこの庭のことを忘れちやたのよ。私達は年中此處で暮しませうね」。

と二人は申しました。お雪さんはその大きな眞白い外套で庭の草を被ふてしまひ、お霜さんは木を皆銀色に塗りました。それから二人は北風さんを呼んだら、北風さんがやつて參りました。北風君は毛皮にくるまつて來て、一日中庭を咆え廻つて、煙突の筒冠を吹き落したりしました。

「これは面白い所だ。霰君を呼ばなくちや」と彼が云つたので、霰君も參ることになりました。霰君は毎日三時間程宛、お城の屋根を叩きつけて、瓦を大抵破つてしまひました。それから一所懸命庭をぐるぐる駈け廻りました。霰君は灰色の着物を着てゐて、吐息(イキ)は氷のやうでした。

「どうしてこんなに春の來るのが遲いんだらう。陽氣が變るといゝのに」。

我儘大男は窓際の椅子に凭つて、外の冷たい眞白な庭を眺めながら申しました。

だが春は參りません、夏も參りませんでした。秋になる

と、ごこの庭にも果物が金色に熟しましたが、大男の庭にだけは一つも成りませんでした。

「この人はこても我儘なんだから」

と秋は申すのでした。それでこの庭はいつも冬で、北風や霰や霜や雪が木の間を踊り狂つてゐるだけでした。

或朝のこと、大男が寢床の中で眼をさましてゐますと、何か素敵な音樂が聞えて來るのでした。あんまり素敵なので、これはてつきり、王樣の樂隊の通つてゐるのだと大男は思ひましたが、實はそれは、一羽の小さい紅鶸(ベニヒワ)が窓の外で歌つてゐるのだつたんです。けれども彼は隨分久しいこと小鳥の歌ふのを自分の庭で聞かなかつたものですから、この時の紅鶸(ベニヒワ)の聲が彼には世界の一番綺麗な音樂に聞えたのです。それから彼の頭の上では霰が踊りを止めました。北風君も咆えるのを止めました。そして開いた窓からは實に好い匂が匂つて來ました。

「やつと春がやつて來たな」

と大男は申しました。そして寢床から跳び出して外を眺めました。

すると彼は何を見たでせう。

彼は實に不思議なものを見たのです。塀にある小さい一つの穴から子供達がもぐり込んで來て、木の枝に上(ノボ)つてゐざつたのです。彼に見える木といふ木には小さい子が一人宛上つてたのです。そして木達は子供達が歸つて來たことを大變に喜んで、體一杯に花を咲かせて、その腕(枝)を子供達の頭の上にやさしく搖つて居りました。また小鳥達は嬉しさのあまり飛び廻つたり、囀つたりして居り、花達は綠の草の上から顏をのぞかせて笑つたりして居りました。それはほんとうに美しい眺めでした。が只一隅だけまだ冬の儘になつてゐる所がありました。それは庭の一番奥の隅でした。そして其處に一人の小さい男の子が立つてゐました。この子は小ちやくて、手が木の枝に屆かないもので、メーメー泣きながら木の周りを廻つてゐました。その木は可哀相にまだすつかり霜と雪に包まれてゐて、その上では北風の奴がビュービュー、ビュービュー咆えてゐました。

「おのぼりよ、妨ちやん」。

と木は云つて、出來るだけ枝を低く垂れましたが、その子

はさても小ちやくて駄目でした。

大男はそれを室(ウチ)から眺めて、さすがに可哀相になりました。そして彼はかう申しました。

「俺はほんとうに我儘だつた。春が此處に來ないわけが漸く解つた。俺はあの小ちやい子をあの木の一番高い所へ乘つけてやらう。それからあの塀をぶちこはしちまはう。そして俺の庭を何時までも何時までも子供達の運動場にしよう」。

大男はほんとうに今までのことを後悔したのでした。

そこで、彼はそーつと階段を降りて、表のドーアを靜かに開いて、庭に出て來ました。けれども子供達は大男を見て、驚いて皆逃げてしまひました。そして庭は又元の冬にかへりました。只例の小ちやい子だけは逃げませんでした。といふのは涙が一杯眼にたまつて、大男の出て來たのが見えなかつたのでした。それで大男はそーつとその子の背後(ウシロ)に忍びよつて、その子を自分の手の上に靜かに乘つけて、例の木に上げてやりました。すると直ぐにその木に花が咲いて、そこへ小鳥も來て歌ひました。小ちやい子は兩の腕を差伸して大男の頸に抱きついてキッスをしました。

ほかの子供達もこの樣子を見て、大男がもう惡い人でないことが分つたものですから、走つて戻つて來ました。それと一緒に春も戻つて來ました。

「子供達、この庭はもうお前達のだよ」

と大男は申しました。そして彼は大斧を持つて來て、塀をぶちこはしてしまひました。近所の人達が十二時に市場に行く時には、彼等が今まで見たことのない程な美しい庭で、大男が子供達と一緒に遊んでゐるのを見るのでした。

子供達は一日中遊びました。そしていよいよ夕方になつて左樣ならをしに大男のそばへ寄つて來ました。

「だけれどあの小ちやい子は？あの俺が木に乘つけてやつたあの子は？」。

大男は訊ねました。彼は自分にキッスして呉れたといふので、その子が一番好きだつたのです。

「知りません。歸つてしまつたんでせう。」

子供達は答へました。

「お前達はあの子にね、明日きつと來るやうに云つておく

れ」。

大男は申しました。けれども子供達はその子の家(ウチ)は何處だか知らないし、今まで見掛けたこともない子だと申しましたので、大男はすつかり悲觀しました。

子供達は毎日、學校が終るとここの庭に來て、大男と遊びました。けれども大男の一番好きな子はちつとも姿を見せませんでした。大男は子供達みんなに大變親切にしましたが、最初にお友達になつた子に會ひたくてしやうがありませんでした。そしてよくその子のことを口に出しては

「あの子に會ひたいなあ！」。

と申しました。

幾年か過ぎて大男は大變年を取つて弱りました。彼はもう遊び廻ることが出來なくなりました。それで大きな肘掛椅子に腰掛けて子供達が遊んでゐるのや庭を、眺めて樂しんでゐました。

「わしには美しい花が澤山ある。だけれど子供達はその中で一番美しい花だ」。

と彼は申しました。

或冬の朝、大男は着物を着ながら窓の外を見ました。彼はもう冬を憎いとは思ひませんでした。といふのは春の眠つてゐる時が冬なんで、今花が休んで居る所だといふことが分つてゐましたから。

と急に彼は驚いて眼をこすりました。そしてしきりと目を見張りました。確かに不思議な不思議なものが見えたのです。といふのは庭の一番奥の隅に、綺麗な眞白い花に包まれてしまつた一本の木があつたのです。その枝は皆金色で、それに銀色の果物が垂れ下がつてゐました。そしてその下に例の彼の大好きであつた小ちやい子が立つてゐるのでした。

大男は大喜びで二階から駈け下りて來て庭に出ました。彼は草の上を走つて行つて子供に近寄りました。そして子供の側に寄ると大男は怒つて顔を赤くしました。

「誰がお前に怪我なんかさしたのだい。」

大男は申しました。といふのは子供の兩方の手の平に一つ宛釘のあとがあり、小ちやい兩方の足にも一つ宛釘のあとがあるのでした。

「誰がお前に怪我なんてさしたのだい。お云ひよ。わしが大きな劍でそ奴を切り殺してやる」

と大男は呶鳴りました。

「いゝえ、これは愛の傷なんです」

と子供は答へました。

「お前は誰？」。

大男は申しましたが、何だかかう急にその子が只人でない尊い方であるやうな氣がしてきて、彼はその前に跪きました。

すると子供は大男にニコニコしながらかう申しました。

「あなたはいつか私をあなたのお庭で遊ばせて下さいましたね。今日はあなたを私の庭へ御案内します。其處は天國なんです」。

そしてその午後子供達がいつもの通り庭に入つて來た時には大男は例の木の下に眞白な花にすつかり蔽はれて死んで居るのでした。

をはり

東京女子高等師範學校

保育實習科生徒募集

本年度保育實習科生徒入學願書受附期日は一月二十日から三月十日までゞ、手續の詳細は同校事務所宛貳錢郵劵貼附封筒封入問ひ合はされたしとのことです。